

過去・現在・未来を見据えた北海道の授業づくり

1 実践報告

(1) 「室生も考えてきた『原発の未来』2012」

松本徹さん（室蘭工業高校）

前田輪音

当初、事前エントリーの時点では報告は教本だったが、その

噂を聞きつけた参加者による駆け込み持参が多数となり、結果的に十四本のレポートがそろった。小学校から四本、高校から八本、養護学校から一本、退職者から一本という構成で、多様な年齢を対象にした内容がそろった。当日はこれらのレポートを囲み、三五名が集まり活発な議論がされた。

以下、これら一四本を実践報告、教材の開発、授業の在り方についての検討、の大きく三つに分けて、各報告の概要と参加者からの意見交換を示す。

一年生の地理（週二コマ）での二〇一二年六月に行われた四時間の実践の報告である。報告の冒頭で、宮崎駿の関連するブックレット、藤波心のCD、沢田研二「3月4日の雲」などいくつかの資料が提示された。

一時間目は、泊原子力発電所周辺の地形図で地理的特徴等を読み取り、二時間目に札幌の30が作成した資料（地図）を使い、福島原発事故での放射能拡散距離から考えて、泊原発で事故が起きた時、室蘭も「圏内」であることを意識させる。三時間目に文科省の副読本「知っておきたい放射線のこと」を用し（生徒には難しかったもよう）、四時間目に教科書本文を穴埋めにして書き込ませるプリントに取り組む、という構成だった。期末講座では、原発の未来について考えさせるべく、次の四点一原発の停止・廃炉、再生可能エネルギーへの転換、耐用年数がきたら原発を廃炉にする、原発の安全性を高める一から一つ選び、その理由や考えを書かせる、という課題を設定し

た。

参加者からは、今回は主に地理的分野が中心だが今後はどう展開するのかという質問がだされ、歴史（世界史）、公民（三年生現代社会）を経て、福島にもつなげ、原発の未来を「決めるのは国民」という考えに到達させたいと報告者により回答された。

（2）「エネルギー教育と学習指導案」

亀井清隆さん（白樺高等養護学校）

養護学校・中学生を対象にした指導案（略案）の報告である。冒頭で、原油、ペレット、見学時の写真（カラー版）などが回覧された。報告資料は指導案のほかに、そのもとなつた道内の各発電所の情報、原発関連教育などの動向、ガス、水力、風力、火力、の各発電所の見学・データなどが記載されている。

報告者は、エネルギー環境教育研究フォーラム、文科省・経済産業省主催の「原子力・放射線に関する教育職員セミナー」などに参加してきた。泊原発見学会にも参加、入り口には機動隊の装甲車が朝から夕方にかけて陸上自衛隊のヘリが警戒、施設の重大さを深く感じさせられた。なお、二〇一一年には原子力体験セミナー事業は廃止されたという。

参加者からは原発施設のフクシマ前後での変化は？との質問

があった。基本は変化なし、スタジオジブリの音楽など使ったイメージ戦略が重視されている（その後、ジブリはトトロはひきあげさせたもよう）。また、実際にセミナーに参加した人からは、問題意識を有しつつ見学・参加しなければ広報活動の一環として利用されるような指導案を書かせられる、その場で廃炉や縮小の指導案は書きにくいとのことだった。そのほか「エネルギー教育新聞」の存在についても情報提供があった。

（3）小規模の小学校による地域の米作農家へのアンケート実践

農家の人の苦勞を教師自身が整理すべきではないか、との意識から、三・四年の複式学級で行われた実践である。

報告者の校区は教員住宅を除くとすべて農家で占められており、全家庭にアンケートを配布して記載をお願いした。アンケート結果からは、苦勞することとして、草刈が大変、夏が暑い、腰が痛い、などだが、うれしいときは、いっぱい穂が実ったとき、苦勞が喜びに転化するということがわかった。はたからみると、農家にとっては後継者・TPP問題なども苦勞の一つかと思っていたが、労働による苦勞と、社会的背景による問題・苦勞とを区別・整理すべきだと思った、という。

参加者からは、この実践のように誇りを持って仕事している言葉を丁寧に拾うことが大切であり、汗水流して働いている

人にふれて「こんなに大変なら、米作りなんてやだ、ここで米作っていくなんて」という考えをもたせない実践が必要だ、との発言があった。また、現地学習を実施すると、ともすると労働力としての自身の苦勞、社会システムを変えないと無くない苦勞、喜びに転化しない苦勞、などに目を向けられないことがある。最近のキャリア教育では、仕事はやりがいがないてはならないという一種の脅迫観があり、やりがいがないのな仕事についてはいけないという気持ちになることも多い。これらの問題を解消しなければならないという発言もあった。

(4) 「生徒を動かす社会科実践 現社レポート発表会 倫理

宗派調べ など」 木谷弥彦さん(倶知安高等学校)

一二年生の現代社会で生徒が「書く」課題を主とした実践である。授業の終わりに自分の意見を書く課題を設定し、次の時間に「教科通信」に数名の子の意見を掲載し印刷・配布する。発表会は、二〇一一年度から全員に向けて発表し全員で評価することになっている。他者の評価ではあまり悪いことは書かないし、評価をもらう側も喜んでいいる。倫理では自分の家の宗派調べの課題を設定し、保護者からお褒めの言葉をいただいた。「い

まどきの若い人は宗教のことあまり知らないから」と。参加者からは、レポートの評価が高くなるようなことを書く傾向がないか?との指摘に、「ぼそっと本音を言っている生徒

をほめる」ようにしていると回答された。また、倫理のどの単元に「宗派調べ」が位置づくのか、北海道は入植者の宗派の全てのお寺が設置されておりそこに移民の歴史がひそんでいる。戦争のとき、その宗派が何をしたのか(抵抗か、促進か)などもあわせるとよいのでは、との意見も寄せられた。調べた後に事後指導をしてはとの提案もあった。一方、藻岩発電所タコ部屋犠牲者の追悼式では、碑文の文言により団結できない宗派もあり、取り換えるために動き始めている、との情報も寄せられた。

(5) 「地域巡検の実施について」

藤田省吾さん(戸井高校)

一年生の総合的な学習の時間を用いて十数時間での地域巡検の実践について報告された。報告は「地域巡検のしおり」をもとにその目的やコース、生徒の様子などが語られた。

この取組みは、戸井高校に前からいた先生の遺産であり、戸井町の名前を冠した高校として地域・郷土を知るために取り組まれている。

コースは、まず高校グラウンド砲台跡から始まり、武井の島展望台、日浦素掘トンネル、汐首岬袋潤跡、旧戸井線跡、旧戸井線橋脚跡、志苔館跡、縄文文化交流センターを回る。戸井の歴史、特に太平洋戦争にからんだもの、地域の産業などに焦点が

あてられている。

巡検を終えた生徒の感想は、「厳しいもの」があり、あえて今回の報告資料には加えなかったとのことだった。

参加者からは、疑問を出させてはどうか、疑問を書かせて次へというステップを見通した学習計画をたてられるなら、効果的ではないか、その条件ができれば、子どものなかに疑問が育っていく、という意見が出された。二〇一三年には「空襲保存遺跡」の全国大会が函館で開催されるとの情報も寄せられた。

(6) 「平和学習『ヒロシマ見学旅行事前学習』のとりくみ」

米家直子さん(池田高校)

三時間にわたる事前学習は、まず原爆ドームを軸に一、二時間目が構成される。一時間目は日本地図でヒロシマをさがし、地理的特徴、原爆ドーム・平和公園、原爆資料館の遺品の紹介などすめる。二時間目は原爆についてのドキュメンタリーや原爆ドームを残す活動をした女子高校生にスポットをあてた番組を視聴し、感想を書く。親族に被爆者がいる子がおり、了解を取ってその子の感想を次の時間に紹介することにする。三時間目は、核兵器・核実験の問題を国際的な視点から導入された。様々な被害の映像で放射能の被害をはじめて実感した子どもたちだった。簡単にはなくならないだろうが、「時間がかかったとしても、核兵器をなくしていくべきだ」と明言した子ども

いた。

報告者からは、ポイントの置き場が難しく、実際の行動・考え方の変化を促す面で弱い、なぜここで修学旅行をするのか、原爆の子の像の前でセレモニーをする際のメッセージは教師が書いたものを生徒に読ませるので良いのか、などの課題が述べられた。

参加者からは、生徒どうしでの討論・調べる場がない理由が問われた。報告者からは学年団の方針として三時間以上使えず、そのため討論の時間を確保できない、とのことだった。別の参加者からは広島・長崎・沖縄の修学旅行は継続しにくい、との指摘があり、事前学習の型をつくってはどうか、との提案や、今のヒロシマ・かつての復興・ヒロシマの素敵などとも知らせるべき、総合科の特色を利用した事前学習の時間確保の工夫が必要か、などの意見が出された。

(7) 「偏向教育問題を考える」総評解散を題材に」

松林洋さん(上磯高校)

報告者の、なぜ今のような貧困が広がり改憲気運が高まったのか、という問題意識から取り組まれた実践である。報告者は、自身で戦後史を学び、総評が闘う姿勢をとり(「期待」と裏腹に)国政に大きな影響を与えたこと、その原動力は労働組合員の団結と運動の蓄積であったこと、その結果、雇用と生活の安

定、軍国主義化への歯止めがもたらされたことがわかった。しかし一方で、総評が弱体化するにつれ、現在のような状態になっていったこともまた、明らかにになった。これらわかったことを反映させ、授業を構成した。

当日、参加した学生からは、「日の丸・君が代を授業で勉強するが、最終的に歌うのは自由だよと濁される。どうしたらいいか」と質問された。いろいろな意見がだされたが、この質問への直接回答とはならなかった。結局、残念ながら、戦後のあの時期から、実態として指導要領は憲法より強い存在となってしまうている、との意見が印象的だった。

2 教材の開発

(1) 「釧路・鳥取の一〇〇年の歴史―授業化に向けた教材研究を中心にして―」

山川功さん（鳥取西小学校）

報告者は、二〇一二年春より勤務校に転勤、この地区は明治維新による鳥取からの土族の入植者が開拓した地域である。

そこで、この歴史を取り上げるべく、四年生を対象に教材を開発中で、報告された時点での授業実践は一時間分、継続して展開されていく予定である。

副読本に掲載されている一八九七年、一九二二年、二〇〇

二年の地図三枚をそれぞれ読み取り、アイヌ、開拓、川の切り替え、石炭、そして戦争を学習していく。昔の地図ほどカタカナの地名が多い理由は、「アイヌの人が住んでいたから」との子どもの発言からアイヌの勉強につなげていくことになった。

入植者がその後半減したのは、鳥取と釧路の気候の違い、阿寒川が毎年のように氾濫し耕地が水浸しになるので川の切り替えにつながったのだ、鳥取の人はなぜ鳥取地区（アイヌも住まないようなところ）に入植したのか？！という子どもの疑問などを生かしていく必要を感じているとのことだった。

参加者からは、幕府が割り振りできなかった地域に入ったのであろう、土族の移民が三例あるはず、廃藩置県後、幕府側か否かで待遇が違ったのではないか、土族が釧路にわたってくる船の絵が副読本にあるのでよくみて気付かせる授業を一時間入れたらよい、困窮時にアイヌと和人が支え合ったなど交流にも目を向けるべき、などの意見が出された。

(2) 「イサベラ―バードとゆく噴火湾の道」〜1878 (M1)

年の旧室蘭く礼文華

松本徹さん

自身の校区近辺の地域の掘り起し作業の一環として、外国（日本）に療養にきたイサベラ・バードが記した『日本奥地紀行』（高梨健吉訳、一九七八年、平凡社、東洋文庫二四〇）のうち、噴火湾沿岸を歩いた部分が紹介された。加えて、年表・

エピソード・「寄り道」など報告者が作成、来年度に続きが報告される予定である。

報告者によると、当時、歩くか馬を利用するかしか手段はなかったが、イザベラが通ったこのルートを追い教材にしたら面白いだろうなあ、と思っっているとのことである。

(3) 小学校の実践で、アイヌ語地名についての学習についての報告

道内にはアイヌ語に由来する地名があるが、山田伸一（アイヌ史研究）によると、後退・消失しているものがあり、それは一九二〇年代からの道庁によりアイヌ語排除が意識されたとのことである。それぞれの地名・字名変更の経緯やもとのアイヌ語地名から、歴史が見えてくる学習につなげてはどうか、との提案であった。

(4) 「シベリア抑留問題―強制労働への構図―」

見田和子さん（昭和小学校）

教科書には一般的なことしか記載されていないシベリア抑留問題だが、二〇一一年に「戦後強制抑留者に係る問題に対する特別処置法」がやっと制定された。これは二十年近くも国会で問題にされながら可決されなかった法案であった。

報告者の父親は三年間にわたるシベリア抑留生活を送っ

た。軍事教練を受けた何万人もの人々がなぜ強制労働させられるにいたったのか、ずっと疑問に思っており、これまでにロシアと日本を結ぶ教材づくりをひとまとめたので、次にこの疑問を解き明かしていきたい、と、今回はその最初の報告となった。

報告者は、父親が残した3つの資料、銀杯（一九八八年平和記念事業特別基金による）、満州第六二三部隊史、『青春の思い出』（父親と同じ部隊の方の日記）を契機に、「シベリア抑留強制労働への構図」を探り、現代を見つめ未来への警鐘としたい、という。あわせて、いくつかの資料も提示され、なぜ強制労働されることになったのか、資料分析、教科書調査分析、など、今後、取り組んでいく方針が示された。

参加者からは次々に発言がなされた。親戚が抑留者だったこと、日本に引き揚げてきてからは差別されたこと、シベリアで思想教育されたこと、「ありの兵隊」（ルポ）はこの研究の構図そのもの、画家の香月泰男の抑留体験は画風に大きな影響を与えたこと、平和祈念展示資料館（新宿）では戦後強制抑留者のコーナーがあること、大日本帝国は日本臣民に何をしたのか学んでこなかった・戦後処理史を明確にしなければならぬ、など、自身の親族との関係にふれるもの、自身ももっている構想など、多様な角度から多くの発言が集まった。

(5) 「国宝(中空土偶)はホンモノか?」

川鑄定明さん(ご退職20年)

一九七五年に南茅部町で発見された「中空土偶」についていくつかの視点から検討した報告である。表紙にはつぎのように記載されている。

「報告書は事実を巧妙に捻じ曲げ、国宝指定のための会議資料にも審議会記録にも錯誤が浮かび上がった。こんなことがまかり通って社会科教科書を歪めていく。研究者が口を閉ざし、だれもが避けてきた闇に迫る」。

報告では、審議会記録、本体の壊れ具合の問題、一緒に出土したとされている土器片は同時採取ではなかった、出土した地層や科学的分析による年代の特定のなさ、など語られた。

参加者からは、いままでの他の報告の場での反応はどうなのか? 来年度からの高校教科書にこの土偶が掲載されたら大変だ、「安全」といったフクシマ原発被害と、似通った状況ではないか、などの指摘がなされた。

教育実践そのものの報告ではないが、考古学者の目をもって教科書に記載されている(されるであろう)ものを検討する必要性について参加者に喚起させた。

3 授業の在り方等についての検討

(1) 「今求められる憲法教育とは」

山本正俊さん(有朋高校)

自身の憲法教育実践を振り返り、報告者がモットーとする憲

法教育について語られた。文科省が設定する憲法教育と非常勤を務める大学の講義で調査した学生の学んだ憲法学習、憲法教育の視点などが記されたレジュメが配布された。

報告者は、現勤務校での子どもの実態に対応した憲法教育ができないか、と日々考えているとのこと、一方、大学での非常勤では高校卒業までに学生が憲法を十分には学べていないことを痛感、九九条、一三条、一二条が一番大切で、これらを学べば良いと考えるものの、大学入試センター試験では一度も出されていない。国家という権力者が過ちを犯さないように監視するための憲法であり、現実と憲法の乖離が「憲法は役に立たない」と思わせるような教育ではいけない、と語った。

参加者からは、政経の話をするまえに歴史の話を一割くらいいらないといけない、との意見があり、報告者からは教育課程上、単位制だが選択方法の指導をしており、歴史学習の素養はすごく重要だと同意した。また、朝日訴訟では一九五四年に社会保障費が大幅に削減、患者が追い出され医者が窮地にたった、これらをぬきに朝日訴訟を語るのもつたないとの意見も出された。また、他国の憲法との比較によりその価値をクローズアップする必要についても述べられた。

(2) 「半年を振り返る、授業の仕方についてのメモ」

角谷悦章さん(帯広緑陽高校)

普段の授業で心がけている諸点について報告された。たと

えば、発問して答えが分かった人が座る、分からない人は分かった人に聞きに行くなどの眠気防止の工夫、グループで教科書の輪読、「よこもち」（同学年・同教科を担当する同僚）との打ち合わせに「内容の整理表」（定期試験での出題予定用語などの一覧表）の共有など、素朴な言葉で語られた報告だった。授業運営や同僚との円滑な関係づくりにヒントをもらえる。

参加者からは、よこもちの先生と共通して扱わねばならない内容は網羅せねばならない、定期試験を先につくりあとは自由に授業を行う、お互いが使ったプリントは双方でわたすようにしている、などの意見・取組みが述べられた。

一一まとめと課題

多数のレポートをもとに、多様な角度からの検討ができた。

実践報告では、原発・エネルギー教育の今後の展開、米作農家の問題から労働問題へ、書く課題の意義、地域巡検で疑問を出させることによる意義の深まり、ヒロシマ見学旅行事前学習の開発・定着方法、など。教材の開発では北海道の諸地域に眠っている多くの史実をどう教育内容に取り入れるか、封印されてきた戦後抑留問題の発掘。授業の在り方等では、憲法教育と歴史教育の関係、同僚との実践の連携の在り方、歴史的事実を歪曲させないための考古学者の目をもつ重要性、などである。今年度掲げた5点の課題にいずれもつながる検討となった。

特に、今年の報告・検討で感じたことは、地域や家庭など、子どもが生活する「場」（物理的・精神的）に教材の素材を見出す取組みが多かったことだ。原発問題、宗教、米作農家の抱える問題、教科書に記載されている歴史の一コマ、史跡…、すべてが自身にどうつながるかが見えてくると、その意味は大きく変わってくる。特に、北海道は広く、勤務校所在地の史実等の発掘は教師に求められる状況にある。そして、抑留問題のような一部封印されてきたかのような戦後史もまた、まさに今後発掘されていくべき重要な対象である。今後もこのような取り組みが報告され、みなで共有し、発展させていくことが期待される。それがまた、「全体構造の模索―北海道の子どもたちに必要な社会科・地歴科・公民科の教育課程編成のあり方」（研究課題）の「全体構造」を構成する要素となりうると考えると心躍る作業となるだろう。中学実践もあわせて期待したい。

一方で、瀬戸内海をさして「太平洋」と言うような子どもの実態もまた、見過ごせない。実践は目の前の子どもの実態にあわせて対応・変化する。しかし、このような実態を前に、困惑している教師も多いだろう。その実態の共有と対応策の検討もまた、今後の課題となるだろう。

（北海道教育大学 教職大学院）